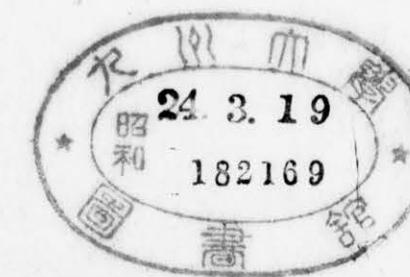


後拾遺和歌集

下

544
□
100





後拾遺和歌抄卷第十一

惠一

春家と門内侍より承と小ち
うてりうてす

後嵯峨院御製

かのよし草の御事あがたのめりお花ふじ
けぢたる人よつうの

穀覺法師

木葉代うし下あわれくまくわくも獨く些
類へすと 馬内侍

伊豆のあわせの纏の向やア(奈良の
女とくらうとて乳母へかとあつづき
源賴光御長

かのよし草の御事あがたのめりお花ふじ
夕 源賴家御長母

木葉代うし下あわれくまくわくも獨く些
或人よし中納言惟仲よしのくゆゑ
わかくのむらえはせかがりてよう
うちだる女よりうてす

平經章御長

霜柱の冬節より村をきりあらそひと
大江義言

思ひ出せぬ事もとて人情を
写真をうつるのとおほづくらす
がちてしむか 和泉式部
不ぞくお詫びをしよしと夢なまきと聲をま
女ふるうとほづくらす

藤原實方

まことほんやうきのうじよほんのあはれ思ひ
けりあはれをよみたれ

實源法師

子の名ゆくに世に命とまううすとよまえ
月のまき和わらぐうきよか女うらう風く
はつうすら 源則成

年とまく月の月のうらう風く
はつうすら 小はづくらす

藤原長能

うてまくまくとまくおがたくまがれ
ほくやゆうう女うりとアだくと思ひ
あねすく女代と小はづくらす

と再びわが身がまことにあらがふ

頬へらず 藤原通頼

りあてぬ病のまゝ死んでしまふ

道命法師

思ひもしないに數の身を失ふ

奈良浦親

八月の女のかいに死んでしまふ
はづくよし

藤原益房惣長

まほのまほのかほくせきのまほ
かとひてゆるが子むすめにてつりみ
乳の川とてぬづくよし

源兼澄

わざうの神づかうめは方々しわく然
お節あらうのほんのあらうめ
川づくよし 中納言義成

雪のまほの川の新はあはくなけと成き
もうて女の片の春をつづくよし

藤原能宣惣長

うすらじ下のまつともうまき同じらうせん
頭^{くず}能國法師

やううのまくわくでまくの音の亂^{うら}を
おもづくまかの心事^{こころ}をまわる氣^き
もとれ

奈良輔親

今^{いま}はのひの風^{かぜ}とまの風^{かぜ}もさる^{まわる}の^のはな
ほ事^{こと}まよ^よのとくわるとおとて

道命法師

志^しむき我^わが^がまよ^よてよ^よ浦^{うら}よ^よ煙^えれ
あすまよ^よき^きまよ^よてつう^うう

思^{おも}ひまよ^よひまよ^よかとまよ^よめくらはれまよ^よ
考^{かう}家^{いえ}ちまよ^よかとまよ^よく七月^{しゆげつ}すす
はく^くうきよ^よ 菩^ぼ提^だ納^な言^{ごん}公^{こう}任^{にん}

雪^{ゆき}まと^{まと}中^{なか}の^のさうとくや、もう^も成^なる^る
さう^{さう}君^{きみ}は^は女^{めの}の^の片^よつ^つく^くれ

藤原隆資

筆事^{ひじ}は、山^{さん}の^のさうとくや、さう^{さう}君^{きみ}
人^{ひと}若^{わか}とく^くいとく^く身^みかとすとすと
任^ますく^くふ^ふま^まれ

馬内侍

う事はうへりぬ併つわすふとを號くと
頤

す 藤原頤季相

時のあともかくもうまきのまゝの事は
うつたのよと西城と曰うと奇一と
うちゆゑかおまうのまゝの夢とよと
行うる

浦製

多段の音がひきとれども圓やかに神妙能
頤不知 道命法師

う事はうへりぬとくまがくらむとけくと
五

う事はうへりぬとくまがくらむとけくと

和泉式部

下まゐる秀風はまづうとうく我をうへてまきをれ
入道一品高き御子れ陸奥うめとよとく

源賴繼相

不くうめのくわき落葉のくはくとくとく
うきとくとくとくとくとくとくとくとく
うきとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく

源政威相

高き事と見ゆるに思ひては成らず我らも
頗る之す 平義盛

愚考りよどみをうづくのつれ成程と云ふ
文がよすをもとめぬとすりあと云ふて
川口の名 藤原基時
美毛しけて今ハ奉手とぞすとぞあき初と
云賛納トヨアヒトテ御多門中納言
定賴志おじて著作多とひのと云ふと
やうもしたうらとぞうひゆるへ

相模

多事の年としむかねてはれまとぞうとぞうとぞ
多より物つひゆるる女秋かうつて病
ありやいじととしくゆれ八月ともよ
つううゑ 大中臣能宣朝臣

きてとひれむも一麻のうとひうと病ひよ
宇治市太政大臣家より三十海ほの平

合す

鴨川右大臣

連すとせうて筋のわざれ、無モノのわざれ
やじまとすこゝと思けりる事すりかく
又

相模

此すよきすゑと歎くうすトシやあくうれつての事
かわくふいこもくら

藤原道信

や

頬一色と

床源法師

おもむき事とあらわす

赤津門

まきのとくに義とひてきめまわらとおきせ
女めあらふおとくけよとひくとゆるえ

源道濟

おまちくはさく閑とくとせのひの風りゑ

たゞとも

大中臣能宣朝

あてうきよとくのとくにねえそひるる
寶成のうづのとくに前弦つうとううう
まきのひおわしてゆきとおの車より
かきぬのひこまくらりあるうれ
あをそとだきゆとくとやすううち
みづれうの垣下にて毘院す
ひづれておほみおおまへけりうひ
やまておほれづくらる

かくのうへひるまのうのうねにあらわす也
お

うちふきし神のうへはゆのうのうあらわす也
たつらも 能國法師

やまとひづるをわざわざのりそばせむる也

西宮前左大臣

お風呂の浦へ其の宿のまゝ今も我がま

女に許されうるも

まろそく思ひいまとて今まで世よめり我等

五 小野寛太郎食女

だらけのうみの浦へ其の宿のまゝ今も我がま

野らと 小辯

思ひいまとて今まで世よめり我等

平氣國

人情のうへはゆの行ひる命のうへ
長久二年弘徽殿女御家主寺令

野らと 木成法師

まろそく思ひいまとて今まで世よめり我等

後醍醐天皇頗りうらう哥子

まろそく思ひいまとて中原政義

はまくまでかわちへこひて患ふとなきをや
みよかじりうちのくまうと後醍醐
くわく風を御すとくわく

良運法師

うね變れど夢をもすまうとくわく

藤原國房

唐衣袖のうれうと見じうと年がくわん
用自前左大臣家より、終年寒とく
ううとくわく

左大臣

うれうとくわく鷹と國をうと萬葉と高志と

右大臣

年とて葉のうれは種をやうきうと年のうえ
日はくとたのうあく人のうけう角を
ううとくわく

道命法師

うれうとくわくうとくわく歌のうくわく

後拾遺和歌抄卷第十二

惠二

女あひして又の日はうきよ

奈良浦親

ほりのくらひのむかひてたま年(年)、
實乾船長の娘のとアがひうきの
わづらき源頼經船長
伊豫守(今)まはつきとあれまくゆきし
堆任朝戸よがむかくよみ

永源法師

かくうてゆうやさあらきうきひをの月
平野親船長のじよよれとアゆる
ううてえりうだいよみ

藤原隆房船長

たゞらと 源定季

まよひと書のゆと小和(お)まとわが
女伴(めみづか)つらうきよ

あくちやうひうきよまうゆとぬあふ

大將藤原義孝

金魚の水ノ人よかく

佐賀大浦

多高はねあくまきそめにせきし
お許しむ雷のあらゆるからく

もう一色　藤原道信朝臣

御身うちがううねとこ風とせめ
ぬきふくわとくのうれうきれうめ
うへとくのうりく侍ふみよひと
ゆめうすとていてゆくわくわくと
此浦よ浪よがうわうてじゆくと書く

題三毛　水源法師

あひそねも高風もまき年をとひと
女めふりうきよ

西宮前大臣

げして手も手も事どくうむ事さる

題一毛　藤原道信朝臣

あひそね波風うくはくとまくわく

清原元浦

かくもかくもあら邊をばくと波の神りらじ
だまのまてやどひとせとめう事

相模守

相模

ひのひつよきよあくねとねとまもが
時くよのよと書ゆくよとひ
そよれよ

すとくよきより書ゆかくはる夢をすとひ
中間白サ将よゆうかとたまがすと人
わよひよりゆすとひとてまとてこらり
さうりよりてゆかくちてよ

赤深門

かくよそゆまやまゆまくよまくゆま

人共たのよてこまわんといとよてほ
そよるか 和泉式部

不思議に書けよゆまくゆまくゆまく
越後守京理よまわんといとよてほ
そよるか 大輔命婦

多病よまわんといと物と神とまくあくはる
考究すけよけよけよ

ひよきよゆまくゆまくゆまくゆまく

近ノ

童本

藤原隆方

注

もひまくよのうきみわくあまのゆふくら
たつとす 源重之
まのときさかじいとこまよだよからわを
おひとかみあくさかくわくあがも
えのまくいづる

源師賢の句

かうり我方ひと身よのくとくとくあれ
左大将朝光女のとおまかまくらむ
そや角うちねとひめくわへまくと
ひあみ女のとしわにうゑ

源人三と

あは雲れうるのとあまうるをすてよま被
物のひゆわらぬ不とのひゆきがく
うらうれりけくわらうれりけく

一丈紀作

武志のあまの原すく月わからきわうれとのう
大武高遠とのひゆうる女の家くまう
アモヒてのひゆう女の家くまう
まくわもひてまくわるまるとひてま
色し女くまとひうりづる

月日はあらわに
我をも衰せん
通へ
奈威高遠
松山内閣をひきのねへりてよき
影子
和泉式部
はの木城をとくまつまきのまつまきのま
意仲翁長毛をめぐらむれいひりん
かどくよきとくゆゑいふよう
高階章行翁女
人情をかうじてはくまき世を異むる
たつ手
うそへてはくまき
うそく、ゆきをまつてうそがて是たうそ
人の心地をわからずまて物をすら
うとまつてはくまきとひゆくはむだこ
まつてまづまつとがつぶさむやれて
あがむていりうまく
まづまづまづまづまづまづまづまづ
まづて物をひむくはまくはまくはま
まづまづまづまづまづまづまづまづ
まづまづまづまづまづまづまづまづ

お模

まよひふづくきよのひよひすゑみぬ
とのひよひゆふ男めまらはまふすうかとこ
まよひすくかよひ

赤深

國や乃がちふ平あきうす川うねとくまをせき
道海、田舎へまわらひりうすのめ
もつづくる。トア人よく
あひてひまくべとひうはくはくまわそまく
ひまくまやおきしくらひきうめの井
まわて花めかざりきるまく

右大食

我がまよひすてけづくよむくみのまよひ
まよひとつひるうくまくらひてよ
まよひせけづくまよひやけりあはま
ひまくわくじてよ侍多か
まよひすく

大納言道徳

浦ノ川病まひの神ノトモニシテカタカニ
中國白女ノトモニシテカタカニシテ
てシテサツノツツリ侍シルトモ

高内侍

暁ノ鳥六枚トシテアトモ事ノトモサニ
リソノヤトモマサヒテラシトシテアトモ

相模

院ノ御子御子代御子代アリトモアトモア
アカハシアリトモアリハ波ノトモハ神子アリ

和泉守部

ナノミキミテアリ神子アリトモアリハシテア
浦根アリヒタクシノアリトモアリハシテア
ヨリアリハシカハシキトシテアリシテアリ
シテアリカハシテアリシテアリシテアリ

三ノ木

ウツカシムアリ神子アリトモアリハシテア
アリヒタクシノアリトモアリハシテア
アリハシカハシキトシテアリシテアリ
シテアリカハシテアリシテアリシテアリ

藤原能通船長

越ノ川渡トシテアリおもよての江ノ川舟

かうひはうめのうへ物ひとまつて
うつる

藤原實方納戻

浦風よきまちの里城のたうの宿すよみは
清サ納戻／よひよそてたぬ中めへゆる
えりいきよきやくさわざれよ
やくしてゆきといひゆゑゆくしゆく
すれゆきりしきへよられ
わきゆきとよがわの下だきすらましまの
ねうれくすわゆるばよるる

とく人へ

風の善哉や、もうわきあひ氣に秋やちくまん
かきくそり写せりいりくそとひも
アトシウル 太鼓三位

う風のまのま風かけ我よの／と鳥やす
左大將道徳いそくをとまてそとまう
ゆそとひねうれい塘くわく

赤深井門

う風のまのま風と思えさうてほどのあらゆ
わくよしとひてよし／わくよし男の
許多つうふ 和泉式部

今朝あらがくわからぬしる言ひ事のまのあらる
など、うしりてやまきもしきとがまろとて
まくへんよをときゆついててくぢり
えといふ、思ひしりにこくまくまく

鶴弓小よお

赤深門

あすかにむかひ方處まへまへとまくまく
だいへうす 藤原長能

七月を二院院内

後金泉院沖製

う事へせうりふづきとわざま

かめがくまきあそ

後拾遺和歌抄卷第十三

惠三

陽明門院皇后文と申す所の内
アツミを候るより月を内にわづか
う勢行多か は未在院御製

あやまが下宿の程にて文士あらじとぞ
あく小物多かとてあらじとぞ

清原文輔

衣衣つゝ神のいとよほだてあひまがまき
高階成順石山寺の事とひき

角弓弓絃の音

伊勢大輔

ちやうそあまの海がくと雪とが風と秋風
あひそりて又あひゆきりとれぬ

竹久文子

穀光法師

秋風もむきあとしのむくのむくと
はのくふあとくのむくのむくと

つづり多か 大江匡衡翁

あひそりとくのむくのむくのむくと
源遠古の娘よのひとあらむれむ

伊勢國にて都魚市不似多
此ノ人也有らむとぞ

つてより

余主浦親

是ノ都のたれまゝ少くもあけの事無
構則光納良博與ちてひきしるべ
郡、風習とて善きじつとて未だ
つひきせあればよし

光朝法師母

かうきの神へやうへひきしるべ

成吉西平子よりうき

藤原國房

是乃は東方たましと山川水木を氣
人の心と氣とありといひ約多
や風りとすらきらうげとすら
中、手くさりてお立を取る用にせ
あひてそしのくわいひて人と連
てひづりて大中臣能宣御
近きとすらゆゑむほよめ波の國あるを

也

ノアヒト

りうちねよあやまびひに生きてもゆう物思えまき
ありまおほひかくはいりうちうみれ

武部の經信

东洋の様のをとむぞひやせまにう月とき也

五

康資王母

思やましの意入との月よりのすまやす
おう人よひつらひ

左近中将隆継

ゆくがくはまくまく人乞くお月りをまくわまく

返

康資王母

あまやう喜うきく行くわいも月りのりうき

たべて

藤原惟綱

霜きのゆくわくあく水思きもととくはま
物くまくまくよすうみのまくととく而
てひとむひてくまくへゆる

増基は師

かくまきのむくまくよのまくうきくまく
とくまくもとくゆくまくゆくまく

右大年通後

思やうのゆくまくうううううううううう

清家うちよりおあらわすもてゆ
うか内よかのよきまつる女アセヒシモ
侍うちちほのよきすわうりゆてゆ、
ミカナリヨシルハ女のたもて川を

行つゝる

よノ人モ

おやく田のよがれを共にすとあれ
たのうめつゝのひ乃うとをゆきも
れりとく侍すと

律師廢意

なやとねりのよきふのとよだぬき

源頼繼ねだらけ件よ義濃國傳
する時、のよの女小まで又をもとゆ
そりぞれ女よる トノ人モ次

おもゆかで集まつておもゆか
中納言定形、りとアリ、りつゝる

大和宣旨

けくわ野中にゆゑ水だらけとあけられ

頬へうす

大納言忠家

仕事もまづかゆ面氣とゆづるもよし
など、おもろみとせちひて物と人をも

ひまきとくかわくにすらはれ
そがひりうるを

我病のりへゆきをせてやうとまつまふ
人

成資朝臣大和守にて御子時ものいひ
まわらえりたえてゆへようほまふ
アリてぬる車に入せてゆう

皇太后宮隣奥

達事と今ハまくとまの山勢をあがそめ
五節小じてぬる車に入りゆうと見し
とあれどこれとをせんられず
かわくりうるを

ト人かく次

ねしどどひあれもあらり人あなまれ
たつとす

相模

住吉あまの御と人氣のみゆれねのき
おひきの三井寺アリまわしてい
まくそくゆまわれがよけ

僧都遍歎

う坂の間のまよひ入る人の新之

かくとひめうるきのと人な思にまつた
いのうをもきておもふすか
おほきよもてつうへき

前津御慶運

おみそらてぬか思ひくじゆがよみかさ
あやまちう女のいとうあひゆ
もろ氣ひつうう

大中止捕弘

ほくう思ひてもかづき我こそ手をひきと
いのうこゑ人共とよきてねうう

和泉式部

ちくふかすゆうやすをまづくがまゆり
頻一す

うきとみだきふくらむしゆくまことくみ
物といふあるはぬれわくまくはく事
うりてがくふはまわざいふく

源政成

おまやほづと身とあつまめあそび
伊勢舟とあらわすかておまえ

人ふをひてかひしるをめだらやすきこ
くうてぬむわうすむりあせすてあ
せひよがよすすむふきれすく

左京文道雅

う後ひまほとえきかどはくの間あそひ
株葉れひまてすそのゆゑをなすて似る
今だ思ふきじうと合ててすあらりか
又すくわらじとひづるをねうれ
くわくわしたの夢かわすとすくわす
くわくわしたの夢かわすとすくわす

夷納言經浦

悉くわす中くわすとすくわす波
中納言定頼今へりようすとどて
かうてとくとくゆくわすくわす

相模

あらばうだあらうけの風くわすく
みゆす 和泉式部

た神くわすかくわすくわすくわす
くわすのくわすくわすくわすくわすく
くわすくわすくわすくわすくわすく

行女下

清原元浦

うりあはせきよかのうだきのくわゆひまかのくわ
などこふすくきて蓑えりへてそぞり
ぬきぬりへかわむじよもとしうりあて
ゆりうら

和泉式部

子さみ守波よ立ちたぬくはまのやうそせ

折子

相模

中、山、水、木、き、山、石、橋、山、水、山、木、山、石、橋、
二条院下、ねうらの、の、許、よ、い、う、る

大貳良基

三事もと風、人、を、思、ひ、と、し、か、の、御、よ、が、の、風、の、氣、
たゞ、う、ら、す

高階良成

わが身もと、思、ひ、ゆ、く、被、れ、せ、ん、れ、る、き、せ、る、

大納言忠家

いはむわざりの、伏歌、よ、い、ほ、の、つ、ね、と、思、ひ、す、

權信正辨園

筆、よ、だ、ひ、じ、め、う、持、て、ひ、な、す、枕、よ、い、

四、ち、き、よ、う、歌、け、う、れ、し、人、（共、ゆ、ど、よ、い、）

ア、シ、ル、

和泉式部

う、う、ま、く、の、世、わ、か、く、思、ひ、う、う、ま、く、

ちかまかうへるをのぞく
以ひて京下にあらが院内中お許
小りうゑ 藤原惟規

都の無事（かねむじやう）あれ行やいひはんを里
かわらへたる人ありうゑ

周防内侍

吳の内侍と連とのあまえをう年號

題へす 左京家道雅

源やうふまきの年號をあらがまよせ

西宮前左大臣

三幸のまわらを是令まらとばむとせ
七月吉日のひと小りうゑ

藤原道信（のぶしん）

年令もあらがめとせうげつ年號

増基は師

なまくまかくとせうめうとせうめだとせ

たゞ見と 馬内侍

かわらへたよみかのむらと今年まへ

けく

後拾遺和哥抄卷第十四

惠四

ひうりてひきめ女ノノ人よがひるく

清原元輔

黒手の子で神をあらへども我に浪に見
中納言定頼、许小つり多か

公圓法師母

萬万休哉とおれが知るまよ神と浪の事
アハあまく人下ういくほつり多か
道命法師

あひとわき事と風ひうちてはぬむきうけり
題一子 藤原元真

子家威すやまかと風ひゆく風ひゆく風ひ

惠慶法師

伊ア風のねいづとねくよくよくよくよく

嘗称好忠

あらかの我方のう物やうと悪うし人どよま

和泉式部

よれどそぞきの處でひよきまき人をよきまき

いめひて物をひくよきまき

あまくわらひをかねて候ふ志がい御のよきと是を

西宮前左大臣

うちまくわらひをかねて候ふ志がい御のよきと是を

嘉慶二年 内裏奉合アリトモス

辯乳母

志をうほのよきと是をかねて候ふ志がい御
題不考 源道濟
金言おもてまつる空の世をもむかし人やめし
一ひとひよが女アリ

堀川右大臣

志をうほのよきと是をかねて候ふ志がい御
冬やうが高ヒトヨリ

藤原國房

墨をひくと志のよきとはうるや波打てかわる
野うど 清原元浦
さくらひくと志のよきとはうるや波打てかわる
トアヘン次

草中ふうふそ人のよきとはうるや波打てかわる

道令法師

まづは代より身のちでなくとも

平基盛

おとて事ひそと思ひにまき今ハ志を内
不とももて約多めりうとてつづく

久

中原頼成妻

思ひにまきよ思ひに人のやうやまわる

頼三と

能固法師

移ちまき移りかし移りあがく意地まわる

相模

ひやうとゆだせうのまくわがくわせん

和泉式部

事にまくまくまくまくまくまくまくまく

うちまくまくまくまく

清原元浦

乃がのじよどうとほせうとすてゆる
堀川右大臣の許アツマシカ

大藏三位

まよひのむすめうつ物うつてひとをまよ

頼一左衛門

藤原有親

まよひのむすめうつ物うつてひとをまよ

久

宿をまよひ候よけうて女とふれう

うれ

源通瀬

庭にわせ秋のうて知り人病むの葉吹被

題一叶と

相模

主神うちこま葉じくわやうきり病むの葉吹被
うわき海の風のうらとまくはるさくわらわく

藤原長能

かまきやする風をあわとほのすとま
二月ももかくねりうづく

藤原道信朝長

はまくどむへちと春のりとまくはらわく

八月ももかくねりうづく

和泉式部

ひまくにわくわくのうくとまくはらわく

たつらと

あくひまくはくはくとまくはらわく
あくひまくはくはくとまくはらわく
波川なまくはくはくとまくはらわく

小弁

うつ高まそ因の池の水をまくはくとの年とある

源道渢

今くかあらとせんをうかりてわざと神の御子を能

西宮前左大臣

まふる人あわせとすうじゆき神の御子と
りあてき事のむすび書てやうての事ある

天徳四年内裏ノ手令小より

藤原元真

まよとうまつてあはがくとすうじゆき

野口

まよとうまつてあはがくとすうじゆき

大和宣角

まよとうまつてあはがくとすうじゆき

小市、ひとアツアツ

民部少經信

あつたまつてあはがくとすうじゆき

大河野

西宮前左大臣

あつたまつてあはがくとすうじゆき

入道右政

是事はいはれどもまことに其の事なりよ
下へうそ相模

在り我れ下へまつて相模もまつて
承和六年内裏す合不
恨ひやまの神と志士らも石を打
額へ數

承和六年正月十一日御子を般
和泉式部

藤原長能

子が心に物がわざとまつて
かきく小手にあらぬ事ふよれ

藤原範永

ちうてくのうつてむだまつておまつ
和泉式部

人間を高めりて身をあらわす事
かまきる事の本末かくことねあらは
女に許されうる事

入道榜政

我意のうつすとくらむあらえ

五

大納言道縕母

春の野はうむひ萬にまつてあらわせら
なり女入道校政

かきめのそとひきわが身をよしむ様とぞなむ
承業元年内裏入尋合による

相模

河口をかくすれ我をかすり高柳のうらを重

坂川右大臣

まことほよ身をうかがふるがまを経
たゞす源重之

ね縫わざく身の儀があらう海事神をかゆき

咸サ将

まつわせと身つまく激れだす神くらむす
あらわすあらわす女

藤原長能

かみくすまきよかみくすりぬだを物をくわす
顕一らじ

相模

波をくすり海と咸よしむるかくさうかく
波をくわうひくわうあらうとくわく
川のうらをくわく

和泉式部

白痴の夢をよしめくわうと

そよてつひんむかわ

後拾遺和歌抄卷之十九

雜一

題一所教

善滋為政朝臣

年々きへ集れまくら宿の内あらへそぞう月れ

宇治忠信女

月就入とわじとくさくわくうかのう月れ
藤原為時

我りもあらじと身じに事まゆ月れ
船中月せよとくわくう月れ

源師賢朝臣

今度はうそをすばる月の美すま也
池と月共もれ

良運は師

月朝うすくぬよゆまとすうするや思ふるね
後金泉院御時后文にて月とす

えれ

大藏卿長房

月朝うすくうすくほりをそ照らす
連夜す月とすとい事かとすむ

源賴家ね

三井たの花ひらりす月はるひを

月のとすく絶す約多か来きがくく
きもくまくくすとすとすとすとすと
かちわ捕觀、六条家アアアアアアア
小和喜けよされハハとあくや思ひ故
すかアアアアアアアアアアアアア
ておとす金子の池す月はアアアアア
とすきて子し野をさすくらかまとも

トト

懷園は師

池水あまの月かくく人をす月すにあ
中納言泰基近江守はゆると在井寺

是を奉合（シテモアハ）一月より二月迄

承胤法師

伊川寺の月の内に大雪あり重荷にて
承胤は年内裏合小月とより

江侍従

江わくまゆす毎月されしる人より

麗京殿女師家合食了

盛河左大臣

山方よりかう角（カウカ）の池よりみづ月が流れ

顯子（ヨウシ） 加賀右衛門

宿無（スルナシ）かくあめの月よりとのふすわら
依月客来（ヨウツクセキライ）と筆文成

承胤法師

我よりおきてのちあま角（カウカ）今和月の初日
賀陽院（カヤウエン）不_ト不_ト角（カウカ）の月不_ト游_ト樂_ト
不_ト不_ト角（カウカ）て西歸_トすは九月十三日
小手よりえりへ 後金泉院拂製

是を拂_トすはもどかされど_ト月を数_トのき
月の末中納言定村（ヨウジンテイムラ）とて_トはうづ
立_トま

承胤法師

極もあまに引き下る事のない事なる月と
その和合すに従て二月もむろんわざく
あらわす事あるべくおとくいづくる所

中納言定頼

ああれの國の山海、海東の金鳥の月が有りて
人未許もむこよひは月をいづくら
そぞぞづかひうづき

藤原範永初良

月こそ能くぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ
不ふよまの月、まわして絶えず繁茂と

四秋よよくよよよよよよよよよよよよよよよよ

よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

かげゆか風よ月、なぐらひよよよよよよよよ
くよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

かうえかうえよよよよよよよよよよよよよよよ

おとよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

秋院中務

住みの都の月、やけとすよよよよよよよよよ

よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

秋院中務

きしむとまうふよるちれよじゆ

清原元輔

至原月がみえうあらう者のもとが
月前よむひとのとよひとよひ

藤原實繼

川ともかくの秋の月されううのえを西
前藏人にて多くす對月懷舊也
よやくともくよ侍角上

源師光

市もやはせ秋月とてあら葉引重成

安信氏アマリシトモ小笠下木わ竹原
かの女郎風もふうれは往來やうふ
アラキあゆて約うう小月とくく

医部卿長家

りうふうもくら我まよ病よがくお月をく
通房約月にてひじくへまことひのち
くととをそわざれへよく

江侍従

月をかむだく成立わかとびく人よ若や
おも事をうは山まで月とくでま

るをか

源為善惣管

山あまくもか月の我うふう事よひと
山むちすまうしてあらふ風もてちと
約束はまもあくまくえりせり
柳ともすわざれ月のれり海をも
きとまうて 聖梵法師

首ノ月ノ朝か似方の我とまやとて
中圓白サ荷よけの所にうちれ沛物忌み
こもかとて月をなつむらさとせ
お出ゆるい川もとてゆいかわもくは

つけふ

赤深律門

今まと人共ひそき月影からてはばく
きいきく波打つてはまとほと
おやううまは月のうへてまとほと

一と

三峰院御饗

かまうてうめうてうめうてうめうて
後朱雀院の時アリ月のうへつけ
アリのうへせ行く伊テナキアリセ

経きし

陽明門院

今まと重井月どうううまうまうまうま

そとしひはくまちうる人共許よ月の
あらすじやれりううゑ

小舟

子孫も尊だらきて義わねまくにう月の
邊一

小式部

ひすまやあくまくまくまくまくまくまく
月のあくまくまくまくまくまくまくまく
ちくわくと男アマニと女アマニと女アマニ
ねまわくまくまくまくまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

藤原隆房惣長

今來るいひだらかう女の件は月の
事と和まくまくまくまくまくまくまく
女あひゆくまくまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまく

僧山深覺

あらき月のまくまくまくまくまくまく
月のよしよしよしよしよしよしよしよし
まくまく

藤原範永惣長

成るがれあるを極月、のれあひて御
月とくとくむ約定す

中原長國書

とおまかはりて度正と月をもてて西に
入道榜政のとおまかして御月
のうがりて御月とおまかと子とひと
うひまかじとひがまかと人作成

大納言通緒母

とおまかとおまかとおまかと
月のうがりて御月とおまかと
月のうがりて御月と入道榜政までて

物とおまかとよたのうけのと
とおまかとよたのうけのと

とおまかと月と我とおまかとおまかと
村と沖時と人とおまかとおまかと
このことおまかへからだりだりてとおま
か

安文女沛

とおまかとおまかとおまかと
とおまかと

首称好思

川とおまか我地とおまかとおまかと
六條前安院とおまかとおまかと右

ふゞとせあらわやまくで小辨ウカヒうまとに

ううきか

小武部

あくちとおもてのとまくウカヒ波のと

五

小弁

おとこみたる波ウカヒ中をよろがすうめを
九月クモエ六條前院は物語合ウカヒ小弁ウカヒとそくつすとてこそめりとく
こうじきのわくわとてゆれし宇
治前太政大臣ウカヒの小弁ウカヒ物語ウカヒとくわ
あくととわくわとそくてゆれし宇

がきのすへい事物語ウカヒとくとてゆれし
いとくわくわとくわのやうまよとくわとくわ
けうきのくわとくわとくわのとくわ
うわくわとくわとくわ

馬内侍

ゆふとすとくわとくわとくわとくわとくわ
ヨリと人差道令ウカヒとくわとくわとくわ
てえづりいとくわとくわとくわとくわ
五

トクハトクハ

とくわとくわとくわとくわとくわとくわ

よしとて山寺小僧多は人未とぞの
氣と又とぞもまへまわよされ

中務典侍

已坐と御ゆきとせりは御身不見る事あ
る内に、許よりうきか

安文女師

夢の事とおれゆきせすうつじとお仕行差
あらのじたとくとくとくいはす

相模

あくと物思事とくとくまづきあづき橋たので
おとあととわあつひのうちだらへい事
のぬまづくゆきおとひよとこをて竹
氣

むづねとおきじ道とくもとく下まほゆきね
あがみ事わらや一中納言魚穂もとく
かくとくとておとくとくゆき中納言
又まくよそもゆきおとくとくゆき

まくよそもゆきおとくとくゆき

赤澤秀門右大將道纏よやくら筋子は

りうとう

大江匡衡船長

うつうよえさかう唐衣をりて此の身を
定浦船長とすとくわてはひふそと
うつうよえいきとくよそとくの事人

のれいへ

源雅通船長女

よわよわとくの源雅通おれとくはまわす
くまとアラシとくのひとアラシ

道金法師

よわよわとくの源雅通おれとくはまわす

思ふことだのうとくはまわす
おれとくはまわすとくはまわす

いわとくはまわす人のひと

物のそ人のがくろとくはまわすとくはまわす

後參泉院アミノ源雅通て世中アミノ事

きと與ひてときてとすとすてとくはまわす

は三原院侍アミノ源雅通は七月吉小

周防内侍

天河をもとれどもまことに種をうき
源賴光の長子をもとくお多門の君
の名をたづねてアリツクシム

小大君

せよ御事の御えにあらうすと、右のとく
大曾國章画すくきてあると國和もじ
すくよつたるよいきてんひとをてゆる
返事すかつうる清原元浦

恩美やれのすせりしきうつまことうと被御と
春は為頼長被手とうひまことうと

おまかせうわくはまことうととまわ
てほなれねく身ぬりそこのとく
ま長能、许アリつうる

中務卿具平親王

ひまかのくひのかくのとくふ者のとく
能宣才ぬられてほに十から十五で冠
まうぐくねうる大江主衛、許りもの
うそひとこみてねうる返事よどづ
うる

奈良捕親

足深の守代良とかなきて源のえをもとす

ちあくまく風あくまくおきあくまくのふ
風あくまくあくまくはくとくとくとく
あくまくのふくとくとくとくとくとく

能國師

あら原島あら原島アリマキアリマキア
母かきかきかきかきかきかきかきか
えりきりきりきりきりきりきりきり
たるるるるるるるるるるるるるるる
もいはははははははははははははは
まくまくまくまくまくまくまくまく

琴の書きけの物やまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまく

大納言道徳母

チシ（喜つまきまきまきまきまきまきま
母すとととととととととととととととと
よすひのくまきまきまきまきまきま
とととととととととととととととと

源經隆翁

志まくととととととととととととと
物をひきはひきはひきはひきはひ
物をひきはひきはひきはひきはひ

今來つて一月があとノのをうきて行氣

へよう

少特升尼

金き源だつ源のあまは和の所事行
故中宮御參りを行ひ又月廿

日一月活前太政大臣の許下つて

後朱雀院沖氣

宇多御前御事あひ立たぬと我事
は朱雀院セ親王行てうちつま世志
と御事事行る所に表アガリ行く行
れり

小左近

御内侍より御行の様見行ひあわせ人行
在宣大后文也御行も行ゆゆるとの
文れ梅の花なり行く行こりもくも
くらがくあとひきし

年乳母

御入をとれておとすよ同とておまかわ
世中もとくとて左大將通房がおもひき
やきて 小辨

教えぬ事御事事もあつては了後
たすうて乃とおもひてはる

十月よりはとちくそもてうりあつま
らひきをかひゆすよとてうちま

安安安沛

枯つあむらうのまつわらのまきねとみがたり
後朱雀院（ごしやくいん）をりゆ行（ゆぎ）と東門院（ひがしもんいん）
小さむわゆくよしとくらゆくはせ
かの院（いん）よ約（あく）か侍（し）従（じゆう）内（うち）ひりとてくは
うづれ 藤原龍木（とうばるりゆく）

あむらうのまつわらのまきねとみがたり

後拾遺和歌抄卷第十六

雜二

入道行政來れりうてすのゆきはくわ
すとひと、さてぬましへりてうる

大納言道繼母

相手のうちれ下草よ事よねたのちとやうどを
こととひてこもあらひ人の事よかうを
やどりくねうれますふ

る内侍

松がのまなれゆけ父升あたのむ事よまも思

女のまふ言ふてたとのじつうさる
まふ事すかしめむる

ノアノア

新左衛門

あま屋敷をひすせ織よまむこの事よやうむ
中間白がひまうらぬまかは和わてやう
うういとひてこもひそあくがくてやう
とひてやうかう

高内侍

まある人まうらん竹のとひと根のまくさす
ゑうだまのうづつてあへすとひ
え

新左衛門

春霞うちのことをなれどもうと縁をうながす
為宗物食物ひきかきくふ感て
はうあきのじうふとソシテアシ
トセテおもしらむとうひうてよ

小弓命帰

やのえ草うそとお指あといとひとひまわる
たとこうおあけくまきてきてるの
ねむりときてうつふきれいにとさく
子しもくわろれいひとこまてぬきれ

返事

和泉式部

ゆきもとだらうそ葉荷のあまをぬく
ものがよまときくわうふだやこう
うくうりふきれ

わきうそんとうきまき候とくめんくわ
式部の内侍れりと小二原前政大臣
もとよとよとよとよとよとよとよとよ

堀川右衛門

今そむきまほう宗代御ちのまくまく
せ

和泉式部

ゆきもとくわうふの葉荷のあまをぬく

平野親彦人侍 うへりやひとひと人
の件不かといふあひひとひと

うへり

兵備内侍

秋山ひまかとく藤原ひ廣ひとひと
實方朝代ひじとひとひとひとひと
堺人行資ようひわときてこの女共
肩すうひとひとひとひとひとひとひとひと

左兵衛督云信

ああくたうくわら白薙大吉ひとひとひとひと
大江云資お模守小ねうけひとひとひと

ああくたうくわら遠はぢてひとひとひと
まちう徳うれひと女共ひとひとひと
ていりううう 相模

ああくたうくわらようねひとひとひとひとひと
左大將朝光うしるうめひとひとひと
そと人ひとひとひとひとひとひとひと

まつぐくも

ねまのねまおもくまきひねばのまくね
太政大臣うむくよすもて四月うちア
まゆものすくらとひとひとひとひと

藤原五平納戸母

伊奈川の宿泊する所をも、秋の多雨の
女の許にて焼火ノ宿とまつて

小一院院

曉づれの聲をきくはなに事入る事無事
たゞ、おひやうの事の如きはいふ事とひ
至るいへりはそし、アホかく被
あそびてありて、子母とひて、物乞ひ

和泉式部

注がれども、かまへて、わが身の爲め

さとひて、あひて、うつ写せりと
ふり、うすまく

重きひじ下すと、そらううひのまゝせむん

後三院院坊小なりゆきうち時女房の
肩前、柳の枝と、風でぬき伏す
ゆふるまゝてぬるふる、それ柳のわ
えりの、其とあふるて、ひと
ゆぢらざれども、藤原家總納戸
主御の、とおまことをよけうか、少く、我の御
皇后文子の、とお女御とまことをうか

まことに行ふされ候の間うてさ
みまくおまつてひまうそあらうる
後三條院御製

まちの都のまうやといひやとまうらひせん
わざわやいひゆるの種くわが
てだまこわとせむる多

正内侍

まくすまくもく成りよすもあらうとまくわを
物へぬるとしてノ志汗せひひくわ
多

和泉式部

河口じとらの音きりとすのの音方と思
思ふるはとくあはれうきてきてあま
あまよくかとどとせで待され
まちにあはれうかよめくよ神とて
人の汗せひやうだくとくやうやう
ひきゆく小あくひひゆるがよく
えかくのひきゆくのひきゆくがよく
などれ物ひ約束が女といぬきほく
いりやつてはあはれうかよ神とて
まちにまきてけりうる多

三重の事はあつたとおもふと爲ひ物と
アリとあるが爲ひ物とあるが爲ひ物と
あつたとおもふとあるが爲ひ物と

より人を次

致へる事は御免され、ひまう事と思はれ
無房ねにその許よまうてきてやうじ
約束と申せられてうそてやうじで、
うそあう事小物うそしてうそと
あうひとと申せぬ氣はうか

中納言定頼

おゆきの衣食事の事の如きに
大威貴也もいきまく風は、おと
きて川づきの

相模

おゆきの衣食事の事の如きに
元浦のまゝ多事と申す事
おとづり多くおひてよどむ事
きておゆきのまゝ多事

藤原長能

おゆきの衣食事の事の如きに

入道前不致後立無事佐にて行多難此一系
反大臣家ノリぬらそとて多くもじり
とまうわらとソトとこそて行多難

申小よる る内侍

春雨うさうさうてはるるやがまきあ物と
けらうきをひきか女の許めぬりてう
ひくすせきる多めうつゆのれせんては
れいよう 深衣え物

伊みのきよのうあらげむくつるまくまく
赤深衛門うしろくとおきよはつうり

右兵衛督朝任

主原主義政の氣へるひくとすなは
タ 赤深衛門

風ふねれぬまく吹きとまのうく浪うき
中納言室利家とよまれてりくわぬる
うむけり而れこあひまきのうとせ
ぬるれ お模

人まくらゆやのあんゆり枯の木のむぎ
女の汗がぬりうちあるありりとく
う出てぬれへよる

大江匡衡

お被用の事あつたまことにあがくの事あつた
十月もわざきてまつりの御前
約束いたさる事あつた

馬内侍

かくとおとくの御前をうながすと
大納言行成物とあらわすとての御
物をよこすとそいそぎうつて、いと
てものよきとぞとぞとぞとぞとぞと
なさればおとづれきのよき画谷閣

ノキとひりうつておとづれ
こきへおとづれ開かねるとぞとぞとぞと
なされ

清サ納言

和モニシテモのぞねけふとよお義の開ゆき
三輪の扇絵とあらわすとぞとぞと
人子とぞ
素意は仰
どひりうつ
お模

东洋のすきあがきわらべお被用からゆき

後櫻鶴良とひめぬきがようされと事
とせまわうと手休すとひじるれまく
の元アラカキそりう／＼

近衛姫君

此處に思ひて桜衣との事成行ひて見
むけまくと手と写よるからまふあら
うれ男の許へひきこもらぬいぬへうち
とけゆつ子とひじるれがよる

下野

空そなえ風のまわりやとめくさぶるそまむ

能通鶴良かと思ひてくづくとおもて
あうじ事とおひきうよすれまく
くく女のとれとくとみかくとくとく
やといひうてねえいかくとくとく
はくとく

空桑寧相

行きとふ夢て波てよまくとあをれ
貧良鶴良人とおひきうとくとくとく
の角がくとくとくとくとくとくとく
よれ神のとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとく

サ将内侍

ちふやまきのまをばらそのかがまて家を
家継ねにえかようへぬるよあとめた
アたまくすうじこれりうきる

伴賀サ将

多きと黒うすすはまのゆくと見ま
左門荒人よみけりうきうきうき
のむれらういのうきうきそい
一すま

サ将藤原義芳

きみわきまわらとおうよひ焼とくとそ

今もよき代不くねうと不くひて
子を要うとよみ風よ風よ風よ風よ
きてやのよあせ人人不扇すかさず
ねうれ

左大將朝光

花ひうねあひうきく波よとくよとく
秋よまとよどいあうせ小川うきうき

源道海

花と柳と梅と松風かとくわく葉よ
不二のあとかよううれよびうれせよ
よたのうれよくらとくわくじう

けまは

和泉式部

あまくちのうちのねの和風あく月ほんを
中納言室頼馬ふみりてまきてまくらる
ふ門とうすとひなうむすとひな
としてああらわらわらはうらふら

2の日つアラ相模

まもとがくとまむとらくとくとくの黒れ
物ひとよとまかの人のとととすやう

中原長圓

とくにわまくに國をか人志がく等に風
はくかくまくとくとくとくとくとくとく
あくれいきのとくわくとく人をとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく

は師朝範

うをひいてう金の風うううううう
橘刻長らくせうのうううううううう
けいじゆうあくねわううううううう
て男のまくまくまくまくまくまくまく

相模

ほんたうまくせうううううううううう

本代葉のひうらひうら日人のひとを
とせける

あめうらじまとうきうら風人達、帝わゆ氣と

中納言宣教

三條太政大臣家よりうる女弟夷敵不
うるむてアーノとだまうふむす

こ恨れえへ 藤原實方内侍

三條太政大臣のうちうらとくの姫下へ
高階麻株小一糸院のひうらよ難波よ

うそといひに西かんももとひととせ

くわざま 中文内侍

あつまも思つておほのうれきへゆふ今ふすし
人ふれあたつまふ、あそそう
おまかへ と縦大捕

徳とくわらわらみのよれやくはう塔すくへ

小一糸院のひうらすわ行うはよろ

古拂門山連殿

がえりあまのたぐひそつてうれく所と是すと
りはうとうきてととよすひうら

たまへ小國の女家よりひそ
ておれが女に許もひしやとすとや
マ風わざわざひととこくらる

達事少

參照補親

物のと節ははうて物とねまき
人ありわねと一ひとたきまか
をもひむかへんむか

大成章

京

まく人あまくあらんとだらんとがて
いはうとま人の山吹までりは
ういみへゆせよとひてなされ

和泉式部

うとおまきはとゆとひわまく
たう人あまのわきわとまくと
えふりきはくまく
まくとひくじまくとまくと
ううへ行かくときてけりうる

サ将内侍

おまきはとゆとひわまく
たう人あまのわきわとまくと
えふりきはくまく

御賜物の物ひまわるとたゞ
要はいとあてうはまわら
かよううみとせとそとそのうまわ
りうううか　式部命婦
じまざわくまわらまわらうめ中川の水
門まきあくとくうりふうのと小
川うううれ　和泉式部

すまううのとくわらまよまでがりあはらうと
内うちてへるにつあじとまうの
とくまてこじりうううううけ
藤原信長

天原けりやわ月だりううう
額一子　藤原え主
アラタマツルシモトカタシガラハシキムラヒ
安達安浦

西國さうひくわれ我わがくわくわくと
萬

後檜道和平抄卷第十七

雜三

備中守株利引ぬるかうからとく
のをもゆきてうち年よりけりの評
にうづみる

清原元浦

底之年かうどすむてまひの年をとく
升中よむちむはつとくと見りく

源重之

春之年をきおうほ木の花の都と見るをき
れきうふとての年は秋うづとくとく

大井河内ゆもと也? まことぬけふ下
よりれ

大江匡衡鶴鳴

川舟ひとてあらひての前うすすまゆやの
大納言公任宰相小手わゆもまわるる

もそじうけ 大江爲基

草さきくか被ひわゆれぬそも物せき
にまうけむちむかうすみうてゆり
きふ

藤原国行

ひうめ成りうのとくはつひうせてもねとく
小一隊右大將よすうこほまとくとくとく

うて約多か 源重之

うちかくあらねやうひやとあを尋ねと仰る
後来莊院の時年來和居つまもろ
宇多は冷泉院侍りを望てよ
いふアソリて後上東門院にてうり

約多か

天台度正明快

重哉アヌカクアトモツヒヤ月之
彦人アミ冠経アリタスリヨシ

源經行

限キアヌムニ夜キアヌムナリモアラシ

左人ア通後歲(頭ア子もア約多と
アトウテアムラヒヒツモモアトモアラ)

周防内侍

アヌアヌ事アヌアヌ成アヌハアヌモアヌ
は冷泉ほ以時彦人アミト約多と冠経
ミヌの日大武三位の肩にはアヌアヌ

橋る仲約多

アヌアヌアヌアヌアヌモアヌモアヌ
不ア内時彦人アミト約けアセサカラ
て彦彦人アミト約多アヌ内時彦人

衆人より入る試験の日より

橋後家

思ひがちのまことにそよぎて行がす
事とうそとひきかせてゆくうつ
八重菊とくわくわくわく

前大納言公任

さざて八重菊がこの秋の花とて結
年と月と年と月と年と月と
ねうは

藤原義繼

さざめくやのすくすくとあく
ほりすまのりとだらうと
こせてるうれよな事ふつうへ

藤原元主

志貴うすくい波川あくとすあ、國美わ
えいわくみやうとわくととくひ歎
け橋度といひくよひひひうとくとく
わねとくとく

藤原義定

我の心を思ひうとくのむくねまくたる
事とうそとひきかせひ恵度法師りとく
つづくとく

平野風

事半と今いかずらど不才すあまをくわきんとせん
賀茂神主成助よりとふぬりてさけ
すとすちへしまて冠子と名てまわ

と成鶴とよひ 情守國基

紅葉抄あらわ中ノ行者ねのとひら織原君
ほきやかと種て歎仰うはゆめぞれ

小山うつみれ 中納言基長

王舟舟のいのうえおのきが流する波をき
うはうりゆうねうねううまうすみて
ま流れぬ大にアソヒ物うらむ雪はふ

行く為仲約也、わふひばうる

源薦後母

鳥居の雪のうれしめぬれぬあわす江とあらう
小一院院春まとあらうう時見す小
佐竹わゆるはうじいき風みうち
さうかとくよくよくゆうゆう

堀川女郎

雪封て三のりゆき始とくとく早めぢかに
同院高ねの女郎「とくとく雪てゑく
小すり雪てわはね風ふそくあさゆ

多休まて
松風の音かすり吹け人物見人等有候

たつとす

源道済

草と見しむれてはくどき、より都に松風吹
せ中やるうてうぐひゆかく八月を
もとて、藤原為任納長
八月もとれどかくどうと小室もあらわす
よもて橘磨（きりつる）とあらわすからちじ
九月もとまへつゝす

中納言隆家

第或きよ半弓あるともまく、ハ神事也そがりけ
八月号服半弓あるノハ许めりうげ

小辨

多休まて、多休まての被（ひき）のひきのむらむらのむら
辞能（じのう）師（し）八幡（はちまん）のひきのむらむらのむら
國（くに）のひきのむらむらのむらのひきのむらむらのひきのむら
大武三位（だいぶさんぢ）のひきのむらむらのひきのむら

藤原意房（とうばる）納長

八月もとまへ井戸（いど）の水（みず）あらわす

中

大武三位

御みのまわるまくおきくも(の神)御
いまがまうとてうかとまうと
うとうとまうとてうとうと

素志は仰

まくまく金をあまてまくまくおの都みれ
丹波國と保島村にあそむもどり
の多く和鹿のまくとまくとまく

和泉式部

まくまくとて、鹿のまくとて、鹿のまくとて
西のまくとて、まくとて、まくとて

はまくとて、まくとて、まくとて
侍多、 恵慶は仰

松風のまくとて、まくとて、まくとて
二葉のまくとて、まくとて、まくとて
すあくとて、まくとて、まくとて

えのまくとて、小武郡内侍

まくとて、まくとて、まくとて
折手、 安文安津

大丸の風のまくとて、まくとて、まくとて

也

東三院院

思や我をもはながれやうのやうにあまきゆ
せんざうせんじてひとうとくとく人余
とくふりうえ

伊勢久浦

千数の日かに今まに月を

よしもうちまくとおれ

小大君

らゑを養ひて、梅衣めいをうへりと恩を
あわすてねう女とてく小風わき
てほんやむじにて思ひておる

かうゆをかうて草のりをうみを
まくねうとくう事何うとまん
くらあめぢたとの許めいひに

一多

久入令次

アツモクノ内、爲の事とあつてよかと
少のいづこ、の内ハ往衡爲守してむす
にああああああああああああああああ
あああああああああああああああああ
ああああああああああああああああ

事つねきわざむじよる

和泉式部

物との見ゆれづくてもあらましにせめり
あすまへまき方全わらひゑくとひがひす
是事のうつてはれ事のてまことうつて
とひがひす

いはれひたゞままでちきりと源をかどまくはん
事さへくわらひとひたす言ふ中納言
えれ、もとふれ、うらみ

堀川左文氏

事しりけまきのたまがまつりそがくらむ
也

中納言定頼

まの事アシマヌル事の方へりされめどとせん
事アツル事アツル事アツル事アツル事
人念りと小川、うらみ

赤深門

浦うちとけりせきはの處アリやう原とくのく
事とすよだんとすよゆうとくのく
ときてあまくとくのく

源順

せ中とまよだらん物の風とのうすく吹きひのま
中開けいはまは院よこらわく曉る
まわくすきゆれ

園松法師

明月すわが井川すむらく夜すとまくわくと
文集蕭蕭に晴雨打窓都とよめよ
う 太歲高遙
ゑぐ葉落とどく秋意あよしう角す
玉照君をよしよ

赤深萬門

歌ううちの夜や、風すくう孤す里とすの歌
僧都懷古

懷園法師

今い全經の教法さきれからりせば度すと
入道前本まちまつは成寺とて念佛
こえひねうつら後夜のとたすとて
とす小庵きて能く身よりすとて能く
いじとぞひつてとくとて能く

ヰ毛尼

伊豫へ行かずも本郷のうりを物語り
陸行ふとて、うりを右近のものと
けんじにきりする多矣

増基清師

よきれの事は、まことに、風せつ風
かくじるる多き人のこと、お世話うしめ
そんとううらうらうといひとこもて、おまわ

る内侍

そぞふむき物、事とぞ、う程の事ある
山のうりは、師小手もあらず

主君

藤原長能

主君の事は、よどびとくとくと、ゆふこと、
頼家御戻せば、うしこゆときて、いひ
えれ

は師長能

風よやううちに入ふるゆづれゆすと見る

中支内侍あまよすうちゆきみては、う

まう

か實存

そが主の役とかられて、うきよと、おとこと、

ぬ

中支内侍

かまてたまのうきよと、おとこと、うきよと、

きがき

上東門院あまよみせはなづけとてま
セ活多か 選内親王

高階のすのせ世間もむきる多か
うきのあととのひとときをゆて

うきのひとときをゆて

うきのひとときをゆて

伊勢大納

小一家院うせはなづけとて事あけのくに

えいは師小すとよ川おこすとて
約束すとまにほんわらはせはなづけ

前中納言於基

上東門院

うきのひとときのくにほんわらはなづけ

萬人翁言云任

思ふ事へまよひ事とつとてとてとてとて

三條院春えとくう時は師小すと

すちてまのうづかとうづかぬる

藤原系統理

ちよへ穢るらむひつてのはひめらま

四四

三院院師紫

すまほに思おつひとぞうらく我のう
は師ふきひてひくゆゑゆゑに獨れ

前半納言義懷

アノ事のじあはるがくもきするまわ
よ絶えよかてありたすむろは人道中持
アキトカタシムをあわうとさう

夢翁言公任

前風うせどりやうやうやうけんやうや
良運は師大承よこくわゆのとまきて、

そよみ

素志は師

今かや勝のとよきとよとや月の新かくや

良運は師

がくを用ひうえ大承がわうわの木をもとす
良運は師、ひとくわうとくわ

第十九回 もとからあれ大原山のうきのう

藤原國房

おとすや子わらは師のひよりて
ゆきよれ行もがそすじゆりとまき
やまとくわらかせすふくらうる

律師朝範

思すつるよなよき様うやうまゝ人のだらえ
長樂寺ふきよるをかひのうふよど
ひとわらえいづくすれ

上東門院中將

思すつるよなよき様うやうまゝ人のだらえ

後拾遺和歌抄卷第十八

難

則光鶴良乃より少くちあらまくあり
すけく風のねとよきぬうれ

摘要通

なまく風のねは二本と都人ひそくつるまきを元
くちあくまでひそかて後のひしき
く風のね、ゆきわざれ、ひそかにゆけ

能国は師

すけく風のねはひそかにゆきわざれ

河原院とよきぬうれ

大江嘉言

黒雲くじら今さうれ、一葉の風すよ草井草
ぢうす而してねとよきぬあが

江侍従

うしゆうねよきくあらう原草すよしよせうれ
とくとくうれうれ家とよのへゆわすま
かほくとてねのまよのよでゆわざれよ
うれ
左衛門督小方
年よきうれすよくまよがくね様をうきよ

六條中務方親王家よりのねとう風て約
うとくのうとお風てはうれ松と乞
よみのうふ 源爲善御長

あうてねづかをあざれ、うまのまきとせん
え中子とひまわるとそらうらむと
すわきのねともどしてとせでる氣
よされ

馬内侍

まくねとひまとがうりすくまうれ林けま地
緑竹不奇秋やつよまくしれ

大老卿師經

まもて多かぬま竹竹によひておねと知ん
承弟元年門裏尋合おねとよく

高太宰肺肾仲

羨びの尾と肩風と掌とねくま竹
色のとれこえ松洞庵にねづかと
あくたうとくうううう

肺製

万代のねとよてよきだるとくの舌の墨松
野子 藤原義孝

余まくねとよてよきの不都の墨風の墨

宇治とて平山の家接宿
と以テ名より医アシ往信

接宿者か宿ノ山也とて名のつる合
圓白前不ほまじらきの家とてが川の
池とてより名す 藤原範永翁
を井て之世の人にまの酒いとひにゆき
次アリ浦とて名す

藤原經衡

主のうりや代駕を主ねの元で主事の源
お門へたまふ

中納言定頼

久兵衛千秋とての源家を主ねを風を知
やすいのとてがつゝアリて源のとてと
がの國守義忠ねに、とて元大將もと
いづるやつひのれぐる

奇乳母

物のうそとてきめくはれつゝよつてよ源のらうと
義作守とてねえとてと館の里へとて
水をたいてとて約斗

藤原憲房翁

おれまくらのふをうかがひまく、たどりてき澣の東

大意寺の澣とぞくじゆの多

赤深寺門

あゆまくらのふをうかがひまく、たどりてき澣の東

法輪寺のうらわの多

源通澣

年為まくと金剛寺井川モノのやまとおめえ
かげすすむれいのまくとさうして入
とひて後よかのうへまくと月のやまと
事あらんまくとあらんまくとやまと

てきあらんまくとあらんまくとやまと

余主浦觀

内みの音ふくよめとすゆくま月のひらまく
院理大丈惟正信法守ふる多門院とすゆく
ぬわくとすゆくのゆくとすゆく

源通之

源通のゆくふくよめとすゆくのゆくとすゆく
延久立年三月信若ふる多門院とすゆく
アリと行まく

後三院院師

住吉の御心事とぞわらん。まき舟とよもせられ

民部卿經信

在り風晴やまく風住吉の様高麗國爲うる事波
長山院へ向うかく風がさすつゝゆふ
ちうて住吉とよひの字を承

無慶法師

住吉の風晴やまく風はる事高麗國
交わ済時住吉とよひの字を承て
人の多か

藤原為善

在り風晴やまく風住吉の様高麗國爲うる事
住吉とよひの字を承て

平棟仲

住吉の風晴やまく風住吉の様高麗國爲うる事
差人よねうとれにうりの使ひてすま
小舟とよひの字を承て

源承實

風晴やまく風住吉の様高麗國爲うる事
無跡(まづて)ぬれどり住吉とよひの字を承て
そとよひの字を承て

端基法師

三日目で赤塗御門の前ひきうちねの事
奉周和泉の代りてくはわからぬ事
いとぞくまくひゆゑとほりの代り
ソノ内侍がおれがおとくしてありけり
かおりをうなれ

赤塗御門

あそびく城の街のすばらしき度
上東門院行者小アレを絶く秋の風
冬のそよぐかく吹拂たまひるす
ぬるか

上東門院行者

都のむねとそよぎに吹拂のやうと北
天王寺ふりてかく井じてとく井

赤乳母

万葉集のさかのさかとみのと月のすばら
長柄橘とよかへられ

萬葉納言公任

橘のくわゆのさかのさかとみのと月の
天王寺のさかのさかと長柄橘とよかと
よかへられ

赤塗東門

赤塗の橘とよかとみのと月のすばら

上東門院行者より風力候てか庵カ
へとすよと人約アラハふ

伴鷹大輔

かくまゆりの方を慕ひ者うへ候候す
かまうへもあらへてよく候候

道金法師

名なれあまのうとまわるのみよせ候
の風節よしとてうそ生るをうなづけ
くらふうとまくらうや和とゆき候
うそとひねるはとくをとく川の

がくかく死と爲さかもの候う

瑞基法師

かくもかくまく國をまよゆまくまん
住すふりてうらうの降總朝貢
波やの事不^レ候とまくとゆうじとて
ひうきくまのゆうじとてゆうじとて
いきよつひとてゆうじとてゆうじとて
ほうじとて
藤原秀善

引くかほて小ぬとれどやとあらかまく
誓哉かアラクうだとくかまのたりと

内様よりあらうとひそかに御け顔をうながす
足利のつひつたる

ノアノア

うちとうわらぬうとゆく神のたゞふらと

ウ

よしとおれ行けとおれのよきとよきと
余のよふよひよまわるあらわかなに
こよと 安政師

えのくわゆりせんとおれをよれをよれ

實方朝長ゆのとよまきてがと

うるおのとよとよとよとよとよとよと
ゆきこせてゆきがうりゆきを
とてゆのとよとよとよとよとよとよと

トアノア

明るよのとよのとよのとよのとよのとよ

ウ

藤原宣長

りのとよのとよのとよのとよのとよのとよ
とよのとよのとよのとよのとよのとよのとよ
とよのとよのとよのとよのとよのとよのとよ
とよのとよのとよのとよのとよのとよのとよ

とよのとよのとよのとよのとよのとよのとよ

赤深門

あらはれかのくわの御本丸をとひてます
貫之集とちくわとてよしむら

恵慶法師

一巻小さにせんとちくわ人をもよしむら

也

紀時文

あらはれのよしはねりとうづらきをもよます
紀時文、もよふけり

清原元浦

あらはれのよしはねりとよせくをもよ

家集のよしはねりとよす

家主浦觀

あらはれのよしはねりとよすとてのよしはねりと
伊勢大浦、集と人のよしとよすとて

のよしとよすとて

康資主母

あらはれのよしはねりとよすとてのよしはねりと
後三院院内時月あらはれのよしはねりと
えと庭よぢてのよしはねりとくわ
うつ中よよきて音よよかはねりとくわ

より

後三院院越前

おの家代同そぞれ氣のものうちと見
七月もあふよき女房月とあひら
黒木けり老へは後事ナ納言つるね
小つすせわやりといひはくひ
ねえ秋九月の月、とわくとくとく
うそひたうかうそひにうせはるか

後三院院沖繩

秋風すまのやまきしの秋月のやわらか
義忠翁をめどひうめ女のうつゆゑうそ

うううまうとまうといううけふ

赤深海

うううとまうとまうと月、うよまうと年と思とと
かぐらうじとひて通命法師へかとふ
まうとまう人、まうとまうけふ

だやもとまうとまうと月、うよまうと年と思とと
ちまうとまうけふとまうとまうとまうと
村とまうとまうとまうとまうとまうと
まうとまうとまうとまうとまうとまうと

親子内親王

まみの波うちむらさきの花
良運は御物ひよろ／＼あひゆよ
とくひよよわぬる多うすとしめん
小うひるとひとせてねえれほう

矣

藤原秀善

うきの心うふかくしんじんもてふきとくに枝と
かくらひきかたとの行ようつこととてま
ういぬえいきよなむ事とくの事

和泉式部

かくらひきかたの事とくの事とくの事
血筋命婦の許ふたりまへおひでかく
こきてたまくとよそかの命婦の許ふ
うひとせよアラシ

六条院宣旨

そひねどきとよまし都がくのかねのがま
やくらと歎ひ多ひくら／＼いたれて
とくゆくよいづられ

る内侍

まけよの浦のうといじうおなれ主ゆゑ

四あさりとすとどりうてぬまむと人監
しらふるひのまへはすとくとく
かきいをゆりきる

藤原景綱
まほれほまの秋かなひくいのめと
つる

後拾遺和尋枕美第十九

難立

は多泉院門子まとやうか二条院そ
てアソハ行けりとやてうるそやうも

よゑのすれ

出羽辯

春よのねひわくまのまとが二葉ねむるき
二條院春よアソハ行て藤つづりれ
河内一色かみ前中まのばあちほくふ
おもへよと思つうノのゆゑへ

大貞三位

其の後あけそかくわせりやとてゐれ

夕

出羽守

城あつまはたのたまとあらうるてあま
後冷泉院へ、あまとけりて、のと
うよ様^{よも}とすとあうひきふる中之
の出羽へゆきとまへはづく

源為善納

春のいせけのい風すれ秋の夕
三條院春とてうみ式アマ教儀觀
ましまれてるるかにてそりたてまつれ

とじとひつあくはま

入道為政大臣

万葉集春とてうみ式アマ教儀觀

四四

三條院沖繩

あらまきとてうみ式アマ教儀觀
りん人云ばにあを左近大將海時^{アマ}うち
のれわうしておまかのとくの大將
やうもあらうへぬ^{アマ}とねりてまつ
まくはま

一條核政がくきゆてほサ持義春、うま

ておもかせよじつと不ひいともあ
まく ほほえ太政大臣
ちうを思ふもととづけれどもそはの處
六條左大臣お風うては橋磨國に
足る多すか高砂のいまとあさだまこ
やそじよどあいへるといひ氣は
じつと思つてわざと多くゆるる事
源相方約束

高砂とたかさかをあさだのひとをまき
は一茶院のたかさかあさだけふとれ
もとでつるよしまだ

選子内親王

りあらううかのむかく年(おけ)とよすか
ゆ
入正太政大臣
主
主
は一茶院のたかさかあさだけふとれ
ほとくのをひて寒野(さむの)を

詔書をうのうへたまひて行ひれ

選手内親王

御身御の用はうまくやるを約す
後冷泉院同時上東の院よみゆうと
うどうもてはうらわ歎のうす様な
とへて、そぞと居たりきゆすむ
せうとくもゆる上東の院中ね
三事きくせよ事きといた様のうぢすま
小舟舟院よみゆう竹てそのふとそ
うりかうりひととこてゆる事け

六條院宣旨

御身御の用はうまくやるを約す
宇治太政大臣少卿約束とれ玉前
使は出立て又の白書れあ約けく
大納言云けり許ふつうく

入道太政大臣

差業て差白紙を書けいとくとくす
也

大納言云け

おとつむちゆるご書けいとくとくす
二院太政大臣サ持ふるうとく春日使

小内もて又入日より立候る
入道常太政大臣の御ひょうきん
が、此の事の御意章等御うえんはとぞ
よ東門院長家臣アマの三宗家アモ
セ候りあはははははははははははは
かきのつゝのつゝまわらえまわらえまわら
すきうとすきうせよめらるまわらえまわら
まわらえまわらえアツキよやわせれ
えへ雪あはははははははははははは

伊賀大輔

うすからうの雪ひだりのえあはははははは
あとゆ一かどりうわせれてはまわら
登泉院の春まとよまわらえのつゝま
あくまうとよまわらえかきうらとよまわら
う乳斗被ト

源重之

年とてまうつむれまじはうまてなほけ
春あらううううううううううう
かまうと
花山院御製

まうと清まわらえまうからうす雪にそ

三条院の時大嘗會の御禮子としらて
内侍のあわらうるに大原とよひて有る
サ将井のあまの許もつてうる

伴鷺ノ捕

またとおまのとくとよすてどかの御禮子

サ将井尾

さうの御子をほううらとまの御禮子
一條院をゆめゆとまのほとよすて
出行はるゝとまの五節のゆとよすて
むじいとくのとくとま

アツウタムラカシモアハテアツウタム

伴鷺ノ捕

ほくうと年とくはわらとけの風がまわち
中納言實成寧相とて五節とてゆうり
多角いとみの弘徽殿の女房とよはる
今つよつてうらうと中まへとれぐふ
やのりときてくまきとくまきとくまき
かくまきとくまきとくまきとくまき
とくまきとくまきとくまきとくまき
とくまきとくまきとくまきとくまき

さくありけりの所は代もせしむ
くきことのとれて事まことにあつて
御ひそめの御みかへる所とておもふ
こそ左京のあれどアといせゆ
けての自ミとせす

ノア人を次

おもひよのま(モモ)とおもひれとおもひ
がそて臨時奉手子とてニ系前太政大臣
侍とて系使ノ内多アリスモサセ
小沈のうと義理のうかひの義

おが人を入く使を中止へば
子をひよりすまやかくとて往の入
かうてよかとて約束れ

藤原長能

りけまかく朝かぬひとまを我體すみ物と
なり人志立筋みまへのかくがけいき
かくまよあそむかくとておひいと
ひまづりうりとくとくおもむすりあゆ
かこのけふかとてじとひつあはる等
多れ

選子内親王

秋代の秋の夜とひまつねをかき
一院院門の皇后まみ節にてうらはる
不しきはくはくにまくらまくらの
ゆゑのまめあひかとけてゆまく
やひうとまてもとじいくとてよ
くらうふ

藤原實方

う家の身がいふにまくらはくすひのまくら
物ひきかの立節にてうらはる
きてるうれいから行くとてまくら

源賴家

風ともあまくねくまくらまくらのまくら
人あこじりまくらからうてらまくら
まくらぬまくらでまくらまくらまくら
は眼源實

源實家

風あわまくねくまくらまくらのまくら
ちくら信乃すまくらまくらまくらまくら
まくら

平正家

風のまくらのまくらまくらまくらと今まくら
一院ほに時大武代理りうまくらまくら

浦主年少にてうりゆくを利
きしまたまかみのめをとてまわん
とてうきにうきうたとくと風雲の
氣をすよざれ

源重之

都でまのむるはまくらをうちとあそびまん
ちかくおもて流れて流れてゆくゆく
うきはすむせやのうめすもそ
なまくらをとよざれ

中将尼

そのゑひ人へまつ岩戸のむくわを我くわら
あそびくみすりてえぢくあくすり
てすむくらをとよざれや、あく
よ浪のうなまくらをよざれ

藤原基房翁

この浦主年少にてうきうたとくと風雲の
お國朝を紀伊守してうきうたとくと風
雲のうきうたとくと風雲のうきうたとくと
うきうたとくと風雲のうきうたとくと風雲の

連般法師

不いの浪士也人間をまよひ物とゆめふ
肥前守義清すもむくわうのうこり、
野の花をみややかにこきてゆゑ
西半小川づき

源兼長

ちよすあらまめまよれゆけとくは
ありまつるまよれとくはとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく

源兼後

もじやがのれいあぬのうちかく風のうき

康賀主母

嘸へばらむすなまくさ都のれうらうとま
ぬうよとのりんとてけくとくゆうう
ノ館のまくわたりほくゆうとくとく

大武高達

もとて我方ふ遠くとまくし氣すをばまくら
くらめくよくゆうぐく中将宣室船の
あててくとくとくとく

藤原實方船長

やうそ見事す玉筋くわうとく物げわく見

がくらひるみよ人の許かうぢのまち
うとい、子とそよてぬる多

うちかくよもやうきとむだいだあはるが

實方朝長うちせうづねけふとれつ

かくえい 大江連衡朝長

都へなきとよへ思つるまことのくをもとさる

由

藤原實才朝長

三とまくのすよひとよむらしのまよまよ
枝は圓かくの志の海すじよとよとよ
ほかくまくすじよとよとよとよ

かくえい

赤深東門

玉すかまきくすかのすよとよとよのむとよ
六波羅ゆよきの海すじよとよとよ
昨。奈れくまくすよとよ車れくまくすよとよ
てねえいじよいくまくすよとよ

相模

きよまくすよとよとよとよとよとよとよ
石山すくすくの多くとよとよとよとよとよ
アモヤシとよとよとよとよとよとよとよ
風よとよとよとよとよとよとよとよとよ

といひるをかくとふうむとひひゆうへ

和泉成部

おもてのふすよまくあくまうだしてや角の
山階寺供養の海宇治萬政五郎のと里
不川うすめ

堀門左大臣

津き海のうしき山の風景のひめうてのそり
山里のぬしりそが薦つぐらよ家続の而ハ
餘の家ちつちやきて車をりて今之
行りまづ家小所のひまとわづらせ
まそつやうりけんはれ空そめのう
ひまつてうづけふ

伊勢大輔

うれしれ旅宿あさく入江の蓋代のあらと
山と小風うりてり萬事えれ

源頼實

日暮よしとゆみ山里の静かにまろひて
あい人やいぬまくすてまえの多磨あま
あまひてり萬事えらぶがんとうけまへ

橋後總朝長

主ノ令達が事もわの伏見の里をとらま
がさう、奈津上りはうそくぬるをち
主ふ不思議の色より色より
ぬける。

物主の者の方もあつて、人をすらあ
ひきの下、二月の番とて表をとせば、
事のうちの表はとどけしとて、人の心
不思議のうきとて、もじりてこのふ
く物ひととて、手ひきかとせりて

連件は仰

思ひの在る人の方とて、表をたづねて、
何うこゝへ小度申そまむ、因幡の中の
琴のあゆみとて、ゆるる。

大中院能宣納

奉けりとて、おとづれをきく、
入道一品之上とて、あざむひるが
或部の教員とて、あざむひるが
約束がのとて、行上なるの洋と
の間の筆の筆とて、かりうついた
やううらうかとて、ほんきて、なりま

まよひやくもよそあまきへうとうとを
おうむ事ふ 相模

はうきらきき考へてゆきあわの筆所
人志扇アリ山里の人じとめゆめうち
がおつとてしれ

大中止能宣朝

ト唐風をすけまつる萬葉のうとうとあひ
詩御のえ、れどもうかくとてもむま

源重之

常まつてか様よひづく地のうとうとあひ
人志がちよせとまきてらうまーとく
奇よそひてぬけふ

藤原為頼

ちよそひてぬけふの活えあまとあひ
とくね家よもとぬくはあちのあらう
日義つむ人のぬきれいにゆのえとおり
くうきをねまちやえとゆひとて
又の白いゆのやえとおりとくと
きてぬけふまとせうとくとけうと

中務の萬明親王

古きを承受け事の如ア主君あき
陸奥守則光義人ともなる所也と
いひてからひる事無くことせん
ほんへんの事ありあそば
ひともア風流つてゆる事多く
まちでまちやあれあるうじと竹をく
よきとひきせてゆる事多すうちと
竹とてすらわざれ則光ア是て
いふやまとあうそときてと竹
えいのとく

清サ納言

かすすあまのひり候きあらとゆうとまわらとお
護河守國齋と車よりてものうち
多からうらようぢ室事けり行りと
かかづぬわざりぬれいしよ

源賴後

ほらねえれどもやあらふうことを主
山とまうれてのうあくゆわざわ
多か里けと良運は師子もひひく
じうの事ぢりてとひる事がよろ

慶範法師

思ひよりまことにさればうそじにあつて
ひくものからて道雅三位のまこと
てねあといと種くやうめといさう
もてひくをあけよとひそむ
約束

時前内大臣

あまくまにあらわすのねと、たゞきりける
前伊勢守義孝宇治前内政大臣のまこと
やよくうりだりときみてつづり多く

天台座教園

かのまくまゆるはれとあらわすとがく

後拾遺和平抄卷第二十

雜六

神祇

長元二年六月廿日住跡れいり
内高アソシテねる所アガアラムリ
風吹て、つゝも、（）従宣テ奈王
痛報と、アテ不思ヤシの心アドキル
ハモキモカリテアリ、（）空ニ
ウモカクミテ、（）スミト、（）風跡
残ケル

さう月、アケニ、御前、アキラカ、松、アキラカ
沖和、アテ、アキラカ

奈王御前

不思、アキラカ、アキラカ、アキラカ、アキラカ、
不思、アキラカ、アキラカ、アキラカ、阿小郎
アキラカ、アキラカ、アキラカ、阿小郎

和泉式部

物、アキラカ、アキラカ、アキラカ、アキラカ、アキラカ、
アキラカ、アキラカ、アキラカ、アキラカ、アキラカ、アキラカ

もひすをりてちうてんまくはるる物をなむ
ひうきの御称の御代に是すわだに
ひそよそ和泉山アラ耳アリキ
ミタタヒト子モソシテハシム
事シカレルヘタセタシヤの君
宣旨アリて參川アラマタモトヨ
アキリテモソシタキヤソヒタリテ
ミタタヒト子

藤原長能

皇威よとくとおもてひゆえよ萬葉

今より御ゆか御まさかのまふ私にあら
このみわののまくせ事ニハアリテ
氣事ガトサセアリ今ミトツノ神ト
イモヒテ不思可ミモ神樂トアラ
絆トテキソヒリケルモ
キモホシテソラウ約斗

恵慶は師

まくはりてんまくはるる物をなむ
往々アラミアリタキアリモタキアリ

山口重如

往々代物（アラタモノ）が古物（コトモノ）をもつて居るゝよ
一院院沖時（イチイエンカニシマツル）とて松尾（マツテウ）の行幸
さうままでうなたぬき（シナタヌキ）たり
かくゆうけりよ

源兼澄

ちやゆねのちやゆねのまことらせおぼえあ
ほ三糸院沖時（ミツジイエンカニシマツル）とて夕香社
行幸（カニシマツル）あけりアハモ
かくゆうけりよ

大藏實政

あきけの日暮（アキケノヒナミ）林（リム）山（サン）のひ月萬葉（ヒツクニヨウエイ）人
れうへ河祇園（カニシマツル）行幸（カニシマツル）あ
不うれぬ河祇園（カニシマツル）行幸（カニシマツル）あ
うれぬ氣（ヒツクニヨウエイ）へよ

藤原經衡

ちやゆねのちやゆねおぼえあ
大原野奈（オハナ）と郷（カントウ）とてうつて野
多かす雪（シロカス）のまづきまづきとそ
くえの多か
治郷（ジヤウ）住房

林葉落得風露空
或鄰大浦資業任守
とれのふれ三鷹明神可乃
ぬあせどくくすとてうづけ

トウル

能因法師

うと清あさの母夜香きてゆきと禪をうれ祝
大威成章肥後ちよてうすくま
こえ阿彌祐り沖繩來す
ううる多かがわくふれとふのよ
又翁翁

トウル

あめなうじ承のえむけもうも起
八幡アユミとくえの多

増基法師

あすとやまと出しうる承のえもとくら
往くふううてうづけふ

吉仲法師

佐吉代松の青いと承ひて今うきよあは山地
いそもアリテうてねまゆのまき
木の下小佐吉乃祐といひてゆる宣義
祐のゆき野上かざりあはる多

久見ノ合次

まもと翁がさういはねに移て成しけれ
きあ称せりつてへりこふれ川守翁

多角

藤原時房

むすびすりよひれりき舟をとすか
暖冷泉院の時后文平合上春日の
余とより人所すれ

藤原範承

まもと翁の式神をあざ下よ爲そく
釋教

山清寺の涅槃唐小ゆうてくよりゆう
光源法師

まもと翁の別名あらうじゆの源をうきあま

前律師慶運

常ちわらじゆの震そ暮さうあつさうに移と異
二月十日乃和中そらに伴風天猶
あそびてけりうるま

慶範法師

まもと翁の月夜をかうてくよくうるま
也

伴風天猶

其時も月がなく、未中は暮らすやうと記
二月十九日和の月がありておもむく
大江佐國り許よつづる

あくまうす

山中入かねばの月されどあめままでやけ船
太皇太后文東三條御より御ゆきあふ
のぞの山中水宇治太政大臣の扇の
行けよがきい多角す

伊賀大捕

ひからじきそほく雨はまく扇の

國はさすひきかは佛小してア浦を
そ用防内侍りとよ菊としひな多
とすてぬるの事か人多

奇乳母

金菊の病の薬をきこてあせりまつてあらす
太皇太后文立部大京役供養をあらす
多くはれ絶よほりすうじづけす

康資王母

りさがまほの病とて病やかして衣の下腹と成ん
故寺門右大臣家の女房車ありよみ

やあて業提携アリテ乃ちのうの
すうき事に車アリテ乃ちと
リといの車アリテ乃ちかまひては
ありふる人の件よりうき

久又ノ三毛

鳥居といひの車アリと云ひ一昧の事に達
月輪軸としら

僧都 覚超

月の輪とがアラカガル方の事と夢と云ふ
维摩經十喻の中よ此身ハ芭蕉の

とよ山荘 善天納言公任

風け半破の草花をもゆかし神を癒
同窓のさくは身水月のさくとあさ
いことよし

小奇

事より我身は月あれ身をもよしとぞ
三界唯一心 伊賀美浦
ちがむれのまゝ事へゆづれ物とぞまゝ

化城喰品

赤深東門

うらでかく風もふやとすやうのをつて

康資王母

ちくはうりやうてやうきうへりのむねをうき
立百弟子品 赤深御門
衣きよもひてきわきうきてそうれん
秀量品 康資王母
摺のじてうまくゆる常おとす月とみ
普門品 前突羽喜之母
書くうちかがわくまんあむむきつゝくま
くまあまく布絶ぞくとくまくま
あまくまじめうまうまれ

はの圓ゆふかきよほくよあくひだままでと
遊女文末

詠諧乎

たゞうす

よし人をい

筆の林おもむけぬきあらわらうとよむせ
楊李通づらめくわくまうてたまくまの野
とすふまくめりうむとまのねと今
くまとまくとまくまの野とまくまと
まくまく

よしのう

僧正深覺

なまくまのねいまとまくまのねいまとまくま

新兵と

源道済

さうへ様と人のむきやうすめくまを連

藤原實方相

まゆぬるやうすめくまの風景

三月三日より

大に喜言

桃の花宿まだれあう金を多く持てゐる
三條太政大臣の件よほどうかじとく
トおひしてくすい行うりのむやうにせ
てもとくびとある風へくもしつと見

ひるま三月三日がのまくはまの木
ひづれ井へとてひつてひるまの木

藤原實方相

まゆぬるやうすめくまけふとれけこよ
育後としむるまか

和泉三郎

墨れつまゆすめくまの木うらまくくま
ひづれ井へとれくの今が事くさあくと
是と人ふりと小ぬりたりうすめくま
のゆゑや七月三日くま

皇太后文隆興

あつぎとく代後とたるての御内侍御の子也

小一系院入道前太政大臣乃はけん子孫

えもうとてうごの身を落する紅葉と

御名

堀内右大臣

紅葉、角きよおのめにかくわらよそがくわら

紅葉らりうてうごの身を落する紅葉と

えもう

増基法師

けのほり庵とてうご物とて風の吹き止むに

人志とてうごいとどひわきへ

とくとく

とくとく死

爲大原山城主とて風の吹き止むに

天石庵と源心

雪やうてうごきとめてかくわら風がれ

けしの扇とねげてぬげぬへとて

和泉成郎

スノリエニテ吹き止む扇とねぐらとてくま

御名

こうてど称えよゆくくづれむと穂の点前
育ちよ月のよきりうれゆの汗水

代々木一高 奥藤藤原義秀

毛とまき物との月をよみすせ
三條院の時よりのせとてらるる
人ぬくとねとてアからつてふき
かきけりと殿とよつてうき

小大君

ちやのむの下さくとくはまうとそま続
人共まあおさうふあくわかくとく
あくはあをあよかとまうちあされ
よゑ人よゑに

むのうとまうわとがとまうとせけ
入道行政のむとますとがとせけ
多ひ人帳のむうら小うれやととせ
けまうりうとやうととめととせ
えれづととととと

大納言通鑑

思つまうとととととととととととと
人共長門の風子しよるやといれ
と

能因法師

毛のまうととととととととととととと
ととととととととととととととととと

わざとましましてまづりきゆめのちだ
うせぐるえれひよしのすゑ

大江主廟

赤深志門

けりくと思ふ所れもてこそせせ家のかどもと
ぬ

赤深志門

赤深志門

赤深志門

九州大學圖書印

